

## 子ども祭りに見る日本文化の源流

### —(1) 名古屋の「キネコサ祭り」の場合—

角 田 茉瑳子

愛知県名古屋市中村区岩塚町の七所社で、旧暦正月 17 日に、キネコサ祭りがおこなわれる。祭事に当たるのは、戦前の場合、役者と呼ばれる 10 人の青年と 2 人の少年、1 人の還暦の男性である。

この祭りは、七所社の摂社御田神社で行われることから「御田祭り」ともいわれ、「尾張名所図絵」では「田祭り」と記載されている。また、祭りに使われる太鼓や笛のリズムの単調さから「つうくら祭り」、祭りに使用される祭具のキネとコサから「キネコサ祭り」とも呼ばれる。キネとは立杵のことで、コサとは杵からこそげおとした餅の意味ではなかろうかとの諸説があるが、いずれにしてもこの祭りは、正統な名前さえもはっきりしていない。祭りの意味にいたっては、もっと不可解なものとして、「奇祭」とか「田遊び」として簡単に片付けられているが、筆者はその説とは別な見解をもっている。その点について、第二次世界大戦前の祭の形を中心にこの論文で考察を加えていく。

次第に祭りが簡素化され、変化していくと、その祭りに秘められた民族の文化や思想がつかめなくなってくる。そこで筆者は、この祭りの持つ意味を考察し、日本の精神文化の源流を辿ってみたいのである。

まずはじめに、キネコサ祭りの概要を記しておく。

旧正月 11 日に、境内に集まった氏子総代や古老たちは、七所社の神田でとれた稲藁で大七五三縄を作り、その先に稲穂を吊す。大七五三縄は稲穂の形とし、2 本つくってより合わせる。その日の夜、祭りをを行う役者たちは、神主の家に集まり、固めの盃の儀式を行い、心身を清める「小物忌<sup>こものいみ</sup>」に入る。15 日の晩から忌屋<sup>いみや</sup>（社務所）に籠り、氏子総代（男子）たちが鑽火<sup>きりび</sup>で煮焚きしたもの（山の幸海の幸）を食べ、役者たちは、毎朝拝殿前の井戸で潔斎<sup>みそぎ</sup>をし、本社殿に裸足でお参りをする。

旧正月 17 日の祭りの当日、午後 12 時 30 分に社務所に役者たちが集まり、左三巴<sup>ひだりみつどもえ</sup>の社紋がついた揃いの浴衣を着る。社務所の玄関で鑽火<sup>きりび</sup>をたき、そのまわりを、肩をくみながら「種おろしの祭文<sup>(1)</sup>」をとえまわると、御幣<sup>ごへい</sup>をつけた 7、8 メートルほどの若い笹竹をかついで、神社の西をながれる庄内川の河原へいく。笹竹は枝が 12 本残してある。12 は月の数を表し、閏年は 13 本残す。この時役者は 12 名で、還暦の人（田行事）は加わらない。河原の潔斎場<sup>はら</sup>で神主にお祓い<sup>はら</sup>をしてもらおうと、役者たちは禪<sup>ふんどし</sup>だけの裸になり、笹竹をかついで川へ入っていき、川の浅瀬に笹竹を立てる。笹竹が「種おろしの祭文」をとえながら笹竹をのぼっていくと、笹竹を支えている他の役者たちは、祭文の掛け

合いの部分で唱える。笛役がのぼっていくに従い竹がしなない、ついに折れるが、海の方に折れるとその年は豊作であるという。

神社へ返ると、それぞれの役柄に応じて衣装をつけた役者たちは、佐屋街道ぞいのほぼ町の中心地点から古代行列を出発させる。高張提灯、手張提灯、籠燈提灯、餅をひく氏子たち、御幣を持った神官たち、里神楽、役者たち、来賓たち、氏子総代たちの順に行列は進んでいく。役者たちの順は、「太鼓、笛、獅子頭、後振り、犬持、鷹持、コサ、キネ、斉服、稚子、田行事、笠鉾、射手」で、左三つ巴の社紋がついている衣装をつけて、首に鬱金で染めた黄色い布をまいている。大体が裁附袴に草鞋履きであるが、太鼓役と鷹持役は袴姿、笛役は折烏帽子に形ばかりの蓑を着け、高足駄を履いている。斉服役は正式な衣装をつけていない。稚子役は赤い着物を頭からかぶった被衣姿、射手役は折烏帽子に左三つ巴の社紋のついた素襖を着、下は裁附袴である。この行列が七所社の大鳥居をくぐった頃から、役者たちは自分の持っている祭具で、両側に並んだ人たちの手や肩を叩いていく。群衆も役者たちに声をかけたりする。役者たちの持っている祭具でさわられると、その年の厄が落されるという。

行列が本殿に入ると、役者の祭具と、種壺の上に赤い着物を着た耕作男といわれる人形を神前に並べ、祭典が始まる。修祓、開扉、献饌とつづき、祝詞の奏上が神主によって行われたあと、稚子役が鈴と黒地に赤丸がついた扇子を持って舞う。玉串奉奠が終り、御神酒をいただくと、役者達は本殿前の広場の祭典に移る。斉服役は鎧をつけ、12人の役者たちがそれぞれの衣装を整えて、本殿の前の縄をはりめぐらした聖域の中を、宮司を中心に囲み、肩を組んで、「種おろしの祭文」を唱えながら3周する。

祭文を唱え終わると、役者たちは本殿の東に仮設した幄舎に入り、いよいよ社前祭になる。俗に「総回り」といわれ、櫓の太鼓の音とともに、古式行列（付表1図イ）の順に役者がそれぞれの祭具を持って再度本殿前に出てきて、また聖域を3周する。役者は1周ごとに正面で簡単な所作をして一礼する。

「総回り」がすむと、役者たちは幄舎に入り、今度は一人ずつ出てきて、太鼓に合わせてそれぞれの所作をする。どの役者も3歩進んで止まるという進み方で、1周ごとに正面に向かって拝礼し、3周する。祭具はすべて赤と白が使っており、左三つ巴の社紋が入っている。最初は笛役の人で、直径7センチ、長さ35センチほどの太い笛を吹きながら、太鼓に合わせて回り、群衆を笛で所かまわず叩いていく。群衆はわざと叩かれたいために前に出てくる。最後に手水場の横で藁がたかれている御神火の前へ行き、笛の先で藁火をはね上げてから、幄舎にもどっていき、次の役者と交代する。

獅子頭は頭に角があり、顎の部分に横縞があって、龍の形をしている。獅子頭役と後振り役の人は舞いながら3周し、聖域の中央に敷かれたむしろの上で一舞し、最後に御神火をはねる。犬持役と鷹持役の子どもは、2人いっしょに出る。犬持役は赤と白の紙でまかれたはたきを持ち、車に乗せられた小犬をゴロゴロと引いていく。鷹持役は右手で鷹を持ち、左手は腰において進む。腰にはおにぎりを一つ入れた籠を下げている。はたきで群衆を叩きながら進み、むしろの上では、2人が犬と鷹におにぎりを食べさせ、はたきで口をぬぐってやる所作をする。キネ役とコサ役は2人そろってでてきて3周し、むしろの上で餅をつく所作をする。キネは30センチくらいの手杵で、コサは繭の真中のくびれたところで折り曲げたような形のものである。

斉服役は、弓を群衆の頭上すれすれに回して3周すると、幄舎に入らず直ちに本殿の方へ帰っていく。稚子役は赤い被衣を被り、田行事役と2人で鍬をかつぎ棒にして、耕作男をのせた種壺をかつぎ、出てくる。田行事役は「天下泰平、五穀成就」と書いた大きな団扇を持ち、その団扇で群衆を叩いていく。2人は3周してから、むしろの上でそれぞれの所作をする。耕作男は「ねんねん田うえて、うてめて、田うえて、くろめてでー」と3回唱えながら、種まきの所作をし、そのあと田行事役が、鍬をもって田を耕す所作をする。つづいて笠鉦役がでてくる。笠鉦は直径50センチほどの円形で、大きく左三つ巴の社紋が入り、柄は230センチほどの竹で作ってある。笠鉦役は「総回り」のときは種壺にさしかけるようにしていたが、走りでてくるやいなや、祭場狭しと暴れ回り、笠で群衆を突きまくる。最後の射手役は、250センチほどの長さの巨大な弓を持ち、下端を腰に当て、しゃくるようにして群衆の頭上すれすれに回す。3周してから、「明け方の鳥を一羽打とうよ」といいながら、東の方に向かって弓を引き、矢を射るまねをする。役者はだれもが自分の祭具で群衆を叩き、御神火をはねあげていく。世話役は白衣に青い袴で役者の所作を後見する。

すべてが終わると再度全員が本殿に入り、神にその報告をし、お礼をいって別れを告げる。撤饌、閉扉と続き、宮司一拝と一同拝礼が終わり、本殿から全員が去る。

付表1 図イ 尾張名所図会 名古屋百景の中九九 七社明神田祭



夕方になると、6時頃から社務所で餐応の式が行われ、13人の役者に世話役が五杓盛、七杓盛の膳を饗する。膳はとろろこんぶだけのすまし汁と、するめである。

役者13人が一暴れして、拝殿前の祭典が終わると、御神火の側で「ねんねん田うえて うてめてくろめて、田うえてでー」と祭文を唱えながら耕作の式が行われる。同時に施肥の式も行われる。<sup>②</sup>この時餐応の式で使った杓子を濡らした水と、畳の上にこぼれたご飯を耕作の式に使うことから昔は、本殿前の祭典は、五杓盛、七杓盛がすんでから夜行なわれるのが正式だったのだろう。

## 1. 祭の起源および岩塚の沿革

### (1) 七所社の沿革とキネコサ祭りの起源

七所社は名古屋市内ではあるが、中心街から遠く離れた中村区岩塚にある。庄内川のすぐ東側にあり、徳川時代には小さな宿駅であった。『尾張地名考<sup>(3)</sup>』には、「愛智郡御田神社は同郡岩塚村にあり、今は七所明神というなり」とある。それに七所社にある御神鏡にも、「天慶八年正月十五日、御田天神」と記されている。つまり西暦 884 年に、御田神社がこの岩塚の地に鎮座されていたことになる。

第 17 代七所社宮司吉田盛清氏は、御田神社の御祭神は「本国神名帳集説により『祭保食神』である」といっている。また、『尾張地名考』にも、「祭神一座、保食神」と記されている。すなわち、御田神社は豊穰をもたらす保食の神（豊受大神）を祀ったもので、七所社の祭神ということになる。

ところで、吉田盛清氏（明治中期の宮司）は、「岩塚は熱田の『神領地』だったので、御田神社も熱田神宮内に『遙拝所』を設け、祭礼を行った。しかし、そのうちにそちらの方が本社のようになり、岩塚は荒れ果てたものとなった」と述べたあとで、次のようにいっている。

応永年間の末此地の領主吉田守重が、その故墟たる森林の裡に、熱田神宮をそのまま模倣する社殿を建てて、敬神の誠を捧げたのであった。……略……太古から執行し来れる祭式は今尚岩塚村にある御田神社<sup>ようち</sup>鷹地の七所社に残り傳って絶えず行ふて居る

こうして、応永年間に、熱田神宮を模倣して岩塚村に社殿が建てられたわけだが、七所社の棟札にも「応永三十二年、熱田七社を移し祀る」と記され、この事実を裏付けている。

それに、七所社の社宝である「種おろしの祭文」の軸物にも、同年の奥書きがあることから、この頃すでにキネコサ祭りが行われていたとも断定できる。

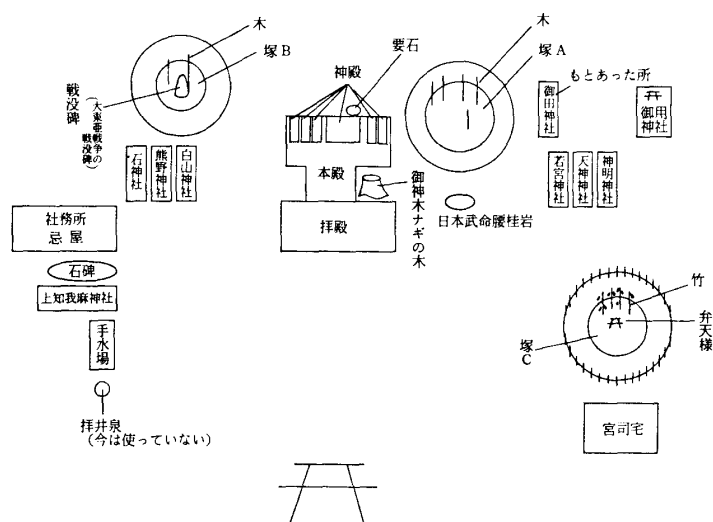
現在では、御田神社は七所社の本殿の東に在る。七所社という名前は、熱田の七社を祀つことに由来している。熱田の七社とは、文和（吉野朝時代）の「熱田神領目録」にると、熱田神社（日本武<sup>やまとたけるの</sup>命）、八剣宮（熱田神宮御代官）、大幸田神社、日割御子神社（天照大神）、高倉結御子神社（別称天香<sup>あまのかぐ</sup>山<sup>やまのみこと</sup>命）、氷上姉子神社（宮簀媛<sup>ひかみあね</sup>命）、上知我麻神社（乎止与<sup>みやずひめのみこと</sup>命）の七社のことである。

ただし、領主吉田守重が岩塚の地に熱田神宮を模倣して移したときには、御田神社でなく、大幸田神社という名であった。その後吉田氏の説の通り、この岩塚の神社は荒れはて、祭る人もなく、祭神が鎮座しておられなかった時代がある。その頃、熱田神宮内にあった御田神社は、「尾張地名考」によると、戦国時代に宝田の小社を建てて祀ったとあることから、ここに御田神社の祭神が移っていたことになる。

ところが、キネコサ祭りは、御田神社の御祭神が鎮座していようといまいと、一貫して「故墟たる森林の地」の岩塚で行われ、しかも、御田神社が移られた場所でこの祭が始められるということもなかった。つまり、キネコサ祭りは、御田神社とは根本的な関わりはなかったのである。後で御田神社の御祭神が保食神であったことから、関連づけたにすぎないのだ。ということは「太古から行われ続けたキネコサ祭り」は、岩塚の地に住む村民と切り離すことができないものでもあったということに

その後七所社の記録には、大幸田神社という名は消え、御田神社になっている。

## 付表2 図口 七所社境内見取図



本殿の中には要石の前に一番大きな御神殿があり、その向かって右に二柱、左に三柱、合計六柱の神が祀られてある（付表2図ロ）。

この七所社にはもう一つ古い石がある。『尾張志』に掲載された坂重吉の文には、「境内に縦横四間二尺許の塚ありて、其処に縦四尺横三尺ばかりの岩も立り。名を不生石と伝ふとぞ」とあり、『尾張名所図鑑』には、「当社、日本武尊五十葺山いそふきやまの荒神こうじんを退治せんと、熱田より彼山に至り給うふ道、此所にて暫く憩ひ給ひし旧地にして、其時御腰をかけ給ひし岩<sup>(4)</sup>」と記してある。

ところで、七所社には珍しい神社が祀ってある。図ロ（付表2）でみると、昔塚であったが今は戦没

者碑がたてられてある塚Bの前に、三神社が祀っており、その一番左に「石神社」があるのだ。そこは、要石と「日本武命腰掛岩」を含めて何か特別な石を祀ったものなのだろう。つまり、この二つの石は神の依代<sup>よりしろ</sup>と考えていいことになる。古墳は塚であり墓である。古代に、森のように木々の繁茂するその墓の前にある平たい大きな岩（日本武命腰掛岩）は、何を意味するのだろうか。さらに要石は何を意味するのだろうか。

ところで、七所社のすぐ北、すなわち要石の真後にあたる土地の名前は、「山」という。要石の両横は、七所社内にある古木が繁茂する二つの塚となっている。

吉田盛彦氏は、「中村区ではこの七所社のあたりが一番高い所」で、「1キロばかり離れると軒一つ分ひくく」なるという。さらに「戦後30年ほどしてから、七所社の左手に下水場を作る際、工事の人たちが『掘っても掘っても貝殻ばかりでなんともしょうがない』とこぼしていた」ともいう。貝塚なのである。つまりこのあたり一帯は小高い山になっていて、しかも木々が繁茂する墓だったのである。

要石のすぐそばにあるナギの木の御神木は、今、中が空洞になり枯れてしまっているが、それでも霊験あらたかな木として七五三<sup>しめ</sup>縄をはり、取り除くことなく大切にされている。本殿はナギの木のはえている場所を四角く残し、まるでナギの木を本殿の中へ包み込んだ形で建てられてある。

また、この七所社には、春祭りと秋祭りに、「湯たて神事」という行事がある。お湯を神様に供える神事である。瓦で造ったくどに大きなかまをかけ、水を入れて、よしで編んで作った蓋をする。戦前は、現在手水場の南にある井戸からくんだ水をかまに入れたという。湯がわきあがると、檜でつくった入れものに湯を入れ、神に供える。供え終わると湯をもとにもどし、村人たちにその湯を分け与える。こうした神事だけでなく、キネコサ祭りのとき、役者たちはこの水で潔斎をしたともいわれているので、この井戸は、井泉であり神の潔斎場としての聖域だったことがわかる。つまり村落ごとに村人たちが拝する「拝井泉」であったわけだ。さらに、塚の前にあり、神の依代となっている要石と御神木、そのそばにある平たい石と拝井泉、繁茂した木々、——まさに筆者は沖縄の御嶽<sup>うたき</sup>に、それらの原型を見たのである。

ところで事実、沖縄諸島には、日本の太古代の文化が今でも温存されている。

沖縄の御嶽の研究をされている仲松弥秀氏は、御嶽は祖霊神が鎮座している鎮守の森であり、「腰当<sup>くさて</sup>森<sup>もい</sup>」だという。さらに腰当とは、幼児が親の膝に座っている状態と同じく、村落民が祖霊神に抱かれ、その膝に座って腰を当て、何らの不安も感ぜずに安心しきってよりかかっている状態をさすという。いわば村落民と何の隔たりもなく、親しみ寄り添い、一体となっている神が祀られている場所のことなのである。そしてその場所は作為的に選定された所でなく、その村人の遠い祖先たちの霊が宿っている、いわば古代の葬所の場であった。腰当森といわれているものの中には、必ずといっていいほど「骨神<sup>ふにしん</sup>」といわれる納骨された場所が在る。

沖縄の御嶽の中には、イビ<sup>⑤</sup>といわれる空地があり、神の降りられる聖域がある。神の入り口はアーチ形の小さな穴になっており、イビの正面の奥所には石やコンクリートで造られた壇がある。壇の上に聖石と香炉が置いてあるが、太古には香炉はなく、聖石だけだったのだろう。そのイビの中には御神木がある。沖縄での御神木は、蒲葵<sup>びろう</sup>やマーニ、ニッパなどである。

仲松氏によると、太古の一つの村落には、一つの御嶽と一つの「拝井泉」があり、御嶽の山を背にし、南に広がっている。しかもその村の宗家は、御嶽に一番近く山の中腹にあり、御嶽の神事を行う「根神」や「ノロ」とよばれる神女を出すという。今でも沖縄では神事はすべて女性が行っている。

ところで、一方の七所社には塚が三つあることから近隣の村落の葬所もこの地にあったのだろうと考えられる。キネコサ祭りを共に行うのは今四つの村落である。いずれにしても、岩塚の一村は、塚のある山を背景にして南向きに広がり、一つの「拝井泉」を持ち、沖縄の太古の村落そのままの形態をしているのである。

また神が出入りされる入口については、沖縄の御嶽では石で造られたアーチ形の小さな穴があるが、七所社の場合、本殿の前の拝殿がその役目をするのであろう。その奥に置かれた要石は、下方が土に埋まって壇の石はわからないが、聖石ではなかったのだろうか。しかも塚ごとにイビがあるとしたら、「日本武命腰掛岩」は、実は別な村落の御嶽のイビ内にあった聖石を置く場所だったのではなかろうか。というのは、太古からある一つの岩が今まで存続するには、それなりの村人たちとの深いつながりがなければならぬと考えられるからである。また各村落の中に一つずつあった「拝井泉」はこの岩塚の地ではここにあったのである。

前述したように、この岩塚の地は、貝殻が地下からいっぱい出たという。しかも庄内川を挟んで対岸の土地の地名に「須賀」という字を使った所が2カ所、「鎌須賀」と「長須賀」がある。「須賀」とは真砂地をいう海岸線地名である。しかも「日本武命腰掛岩」には、日本武命が船を待つ間憩うたという伝説があるということと、吉田盛彦氏の「この辺の海岸線は今よりずっと奥まで入り込んでいた」という話から、岩塚の地は、かなり奥まで入り込んだ伊勢湾の海岸線にあり、木々が繁茂した小高い山の南側丘陵地であったと考えられる。そのすぐそばを川が流れ、気候は温暖で肥沃で農耕に適した土地が広がり、丘陵地であるがゆえに水害からも守られ、原始民族が集落を作るには、最も適した土地であったと思われる。

また沖縄に話をもどす。安里進氏によると、沖縄では、日本本土の縄文後期から平安時代までの間石器文化が続き、その時代を『沖縄貝塚時代<sup>(6)</sup>』と呼んだという。

この「貝塚時代」は、石器と土器を使った時代であり、西欧でいう「新石器時代」にあたる。<sup>よみたんむら</sup>読谷村の<sup>とぐちあがりぼる</sup>渡具知東原遺跡における曾畑式土器、爪形文系土器文化の発見以来、沖縄の土器文化の起源は、縄文時代草創期の1万1000年前にさかのぼるといわれている。しかも旧石器文化になると、それから1万年以前の洪積世に生息していたシカの骨、角をかこうした「骨角器」などの人工遺物の存在と、放射性炭素年代によって、3万2000年前から1万8000年前と考えられている。

このことは、日本最古の民族が、独特な文化を持って沖縄諸島にいたということを意味している。また、その沖縄諸島の西南に八重山群島がある。その八重山群島における人類文化の始まりは、西表島であるといわれ、故金関丈夫教授の考古学の報告でも、「八重山の人の住み始めは西<sup>いりおもて</sup>表であり、同島から波照間その他の島々に移住した<sup>(7)</sup>」とある。その時期は調査によって、3千2、3百年前に遡るといわれている。

なお、「大日本地名辞書<sup>(8)</sup>」には「上代西表島のことを『古見島』と呼び、古の古見間切（古見村）は

盛んなる村にして、かつて西表全島を代表したることあり、三十六島中の姑弥こみは古見にして、西表島を指す」とある。以上のことから、西表島に最初に住んだ部族を古見族という。

牧野清氏は、その著『八重山のお獄』の中で、次のようにいっている。

西表東部古見村は、かつて八重山の政治の中心であった。仲間第一貝塚から既に「船釘」が出土していることから、東部一帯には、古い時代から造船の特技があったと思われる。その地にある三離みはなれ御獄の神名「ふなら」は「船浦」のことで、「造船の神」という意ではないかと推測され、「宇根御獄」のウネも元来は「ウーニ」で航海の神をまつるのではないかと考えられる。このようなことから古来その技術集団ともいべき人々が住んでいた公算が大である<sup>(9)</sup>

つまり、古代の古見族は高度な造船技術をもっていたということになる。その証拠に色々な所へ船で出かけている。

古代の人々は、名前をつけるのに意味を持たせた。文字がないゆえに、言葉の持つ意味は重大なのである。古見族は、自分たちが住んでいた所に、自分たちの氏族の名前もしくは地名を使った。たとえば奄美大島にも沖縄の本島にも、それぞれその西南側に古見または久米という旧地があり、沖縄本島北部国頭郡くにがみには、西表西部の地名が使われている。八重山群島にいたっては、古見族が西表周辺へ移住したことは、地名はもちろん鳩間、小浜、石垣各島の御獄伝説の中にも伝えられている。日本本島の島根県では南北両面の海岸づたいに、久米という氏族が次々に移住していった昔の痕跡がある。いずれも稲作が古くから行われた土地であった。『続日本紀』には、霊亀元年（西暦715年）に、南島から日本の使臣に引率せられて来朝した、信覚しがき、球美くみなどの国人が、貢物をして官位を賜った<sup>(10)</sup>と書いてある。信覚は石垣島のことで、球美は、古見だという説は、今通説になっている。

伊勢が常世の波の重波しきなみ寄する国であったことは、すでに最古の記録にある。それを実証し得た幾つかの事実の中に、椰子の実の漂着があった。潮流と風の向きにより、たまたま伊勢湾に流れ着いたのは植物の種ばかりではない。糸満人いとまんじん（ふつうの沖縄人）もあれば、古見族もあったのである。事実、糸満人の漂着は日本本土のあちらこちらで実証されている。

今は埋め立てが進み、海岸線が昔と異なっているが、筆者の子供時代には、庄内川の河口から名古屋港を挟んで対岸あたりになる知多の海岸に、古見なる海水浴場があった。地図で調べると「古見」、「元古見」の二つの地名が、そんなに離れずに今でもある。前述のごとく、岩塚の地の近くまで海岸が奥まっていたとしたら、古見氏族が舟に乗って岩塚の地に漂着したとしても、不思議ではない。彼等は、西表島とは違った湾内のおだやかな気候と肥沃な土地に満足し、定着したと考えられる。厳しい自然の中で文字なき生活を続けていた人たちが、海の知識においては誰よりもすぐれていたに違いない。何年もかかって得た自然観察力と知識が、農耕生活にも、漁労生活にも、祭事や神事、生死の儀式にも、一貫して力強い指導原理を打ち立てていたのだろう。後世、彼らを支配した者は、彼らのすぐれた文化をそのまま残すことによって、彼らを手なずけたのである。

## 2. キネコサ祭りに見る日本文化の源流

七所社の社紋は、日本本島ではひじょうにめずらしい左三つ巴である。菊の紋とかたばみの紋も同



社の紋といわれているが、実際には菊の紋は伊勢神宮であり、かたばみの紋は宮司宅の紋である。霊魂が三つ輪になって飛ぶ様子を描いたこの左三つ巴に、筆者は八重山群島の一つ、竹富島の西塘御嶽<sup>せいとう たき</sup>で出会った。この御嶽は、中世竹富島が生んだ傑出した人物、西塘をまつる御嶽で、島の信仰の中心をなしている。西塘はもちろん古見の氏族であった。さらに西表島の西岸にある干立御嶽<sup>ほしだて</sup>の節祭の時、「東」と書かれた幟旗<sup>のぼりはた</sup>の一番上には、やはりこの左三つ巴の紋が入っていた。幟旗のあとからは、役者の行列が御嶽に向かって歩いていく。キネコサ祭りも、村の中央となる佐屋街道ぞいの自転車屋の前から、西に向かって、つまり東から西に向かって、すべての祭具に左三つ巴の紋をつけた役者たちの行列が歩いていき、やがて、七所社の大鳥居をくぐる。

仲松氏によると、沖縄諸島の祭りの時は、左三つ巴の紋を使う所がひじょうに多いという。

西表島東海岸の古見村での節祭は、もう行われなくなっている。それで西海岸の干立<sup>ほしだて</sup>や祖内の節祭および沖縄本島の国頭郡大宜味村<sup>おおぎ みそんしゅ なぐすく</sup>謝名城<sup>うんがみまつ</sup>における海神祭りと、キネコサ祭りを比較することによって、その類似について考察を進めていく。

キネコサ祭りは、干立や祖内の節祭と同じように祭りの幕が白と黒、役者の着物も黒。祭具は両方とも赤と白が使っており、どちらの祭りにも役者がいるといったふうに、ひじょうによく似ている。さらに大宜味村の海神祭りも、大宜村内の海岸地域に、西表島西部の地名「上原」が残っており、古代に古見氏族の漂着を感じさせる。

### (1) 祖霊神信仰

キネコサ祭りは旧暦正月 17 日に行われる。

聖徳太子以前、すなわち、西暦 560 年以前は、百歳以上の天皇が大勢いた。仲松氏の話によると、お正月が 1 年に 2 回あったから、歳も 2 回とったのだそうである。旧 1 月 16 日と旧 7 月 15 日である。その前は旧 1 月 16 日と旧 6 月 25 日だったらしい。聖徳太子以後、唐から太陰暦の数え方が入ってくると、お正月は旧 1 月 16 日と旧 8 月 15 日になった。

沖縄の場合は、江戸時代後期までその二日間を正月とし、それ以後八月は盆行事となった。

沖縄の人たちは、海の彼方に理想郷があり、すべての恵みを与えてくれる国があると信じ、その国がニラスクであり、ニライカナイであるという。そしてお正月はその国の神であるニライ神に豊作を祈り、自分たちの祖先である祖霊神と共に楽しく過ごす日なのである。つまり祖霊神祭りと、ニライ神（海神）祭りを同時に行う日が、古代のお正月だった。

一方、キネコサ祭りの旧 1 月 17 日は、古代の正月 2 日にあたる。たしかに旧 1 月 15 日の夜から役者たちは大晦日のこもりをするように忌屋にこもる。役者たちが集まる前までに神社社務所の大掃除をし、七所社の大鳥居に大七五三縄を張る用意をする。神社の飾り付けはもちろん、要石、宮司宅にも七五三縄をはり、門柱、制札の取り付けをする。旧 1 月 16 日はいよいよお正月だ。役者たちは早朝、拝井泉で潔斎をし、御田神社に遙拝をしてから、御神火で暖をとる。朝食には大七五三縄作りの日についた餅を食べる。そのあと役者たちは「御御供様<sup>お お おくさま</sup>」作りをする。もち米とうるち米を半々にし、蒸して小さな山形にした「御御供様<sup>へぎいた</sup>」を、一つの折板の台の上に縦横 5 個ずつ、合計 25 個のせるのである。

る。「御御供様」は10台作り、六柱の神様と御田神社、上知我麻神社<sup>かみちかま</sup>にそれぞれ1台ずつと宮司宅へ2台供える。「御御供様」は、キネ役とコサ役以外の役者が作り、キネ役とコサ役は、「御御供様」を作った残りのもち米とうるち米で、こわ餅をつく。それを五合マス(12センチ四方)の大きさに四角く切り、平たい鏡餅にする。その平たい正方形の餅を、10枚は神様に、残りは明日の朝食分として、1人2枚あて作っておく。

それぞれの仕事が終わると、役者たちは明日のために、自分の役や、「種おろしの祭文」の稽古をはじめ。

この日、「御御供様」と、餅と、山の幸と、海の幸と、神酒を、御神木の前を御厨<sup>みくりや</sup>に見立てて作った仮案<sup>かりあん</sup>(仮の台)においておく。

17日は、式典の前に、御神木の前の仮案のお供えをそれぞれ六柱の神にお供えするが、四角い鏡餅だけは、要石の前の一番大きな神殿にまとめて10枚供える。そして役者たちも朝食には昨日ついた鏡餅2枚を焼き、味噌をつけて食べる。

ちなみに、大宜味村謝名城の海神祭りの場合、ついた餅はニライ神に供え、つかない餅は祖霊神に供える(神女の大城茂子氏のことば)という。

七所社の宮司吉田盛彦氏(現在の宮司)は、「『御御供様』の数は昔は氏子の数だったが、今は数が多くなり、折板一つに25個と決めています。」という。つまり、七所社のすべての神に「御御供様」を供えるということは、この日七所社においてになる神は、すべて祖霊神だということになる。さらに要石の前の御神殿にだけ「御御供様」と10枚の鏡餅を供えるということは、祖霊神とニライ神が、今日は、ここを出たり入ったりなさるからだろう。

仲松弥秀氏の『神と村<sup>(4)</sup>』によると、「祖霊神とは、村落の鎮守の神であり、守護神である『おそいする神』である。村人からすれば『腰当神』である」という。「おそい」は、「蔽い」であり、愛育の動作である。その動作が祖霊神の機能顕現であるとする、御嶽の祖霊神は、自分の子孫を愛し、保護し、その繁栄と幸福、平和を願ってくれるものである。だからこそ村人たちは安心してよりかかり、腰当<sup>くさて</sup>し、自分たちの腰当神の鎮座されている御嶽やグスク(古代の葬所)をよく守り、近隣の村よりも優れた神にしようとしたに違いない。村落の主や島の主たちも、村人を「おそい」し、「おそい」なる神の心を体で表してきたのであろう。仲松氏も、後世出現してきた「世の主」なる沖縄の支配者は、当初、島民を愛護し、「おそい」していたという。

ところでキネコサ祭りでは、古式行列の時、他の役者は自分の役柄の衣装をつけているのに、イミホコ(斉服)だけは鎧をつけていない。七所社境内、すなわち、御嶽の仲でだけ鎧姿となり、しかも、自分の所作をするとすぐ神殿の中へ姿を消す。他の役者のように、村人を叩いて暴れまわることはしない。つまり、斉服はこの場合、ニライ神を迎えて喜びを現わした、この岩塚の地の祖霊神であると考えられる。

祖霊神は常に善神であり、愛育、保護の立場をとるものであるが故に、豊穡をもたらすものではないのだろう。

沖縄では祖霊神祭りの時、お墓で一族そろってごちそうを食べる。墓は個別のものはほとんどない。

親族が一同に会し、祖霊神と共に会食をするのである。そのとき子どもたちが踊りをするが、それは村の繁栄と、次の時代の子孫の繁栄、村の若返りを意味していると仲松氏は語る。漂着してはじめて新しい土地に住むようになった人々にとって、子孫の繁栄こそが最大の願いだったのだろう。

キネコサ祭りが青少年で行われなければならない理由もこのあたりにあり、沖縄を原型とした祖霊神信仰は、キネコサ祭りの中に生きつづけ、この子ども祭りの「心」を形成しているといえるだろう。

## (2) ニライ思想

沖縄にはセヂという言葉がある。仲原善忠氏は、その著書『おもろ新釈』で、「セヂは霊力を意味する」といい、「セヂが剣につけば霊剣となり、石につけば霊石となる。門、港、舟、杜、城等にもつき、人につけば超人となる<sup>(12)</sup>」という。霊力とは、人間にできないことを可能にする力なのだろう。つまり神とはこのセヂを持ち、人間を愛し、救ってくれる人なのである。このセヂを持って「おそい」してくれる神が祖霊神であるが、もう一つ、沖縄諸島の人々が信じた神があった。それは島人たちが、潮流によって海岸に流れ着いた見たこともない植物の種や品物を見て、理想の国を想像し、豊穡をもたらし、文化をもたらす、海の彼方からやってこられる神のことである。その時、神を導くのは火であり龍であった。「火の神」であり「龍神」である。龍神は水を支配するものであり、水のセヂを持ったものである。天体にかがやく月や航海を助ける星、とくに子の端星（北極星）なども重んじられた。後世になって、琉球王府政権者は、天上界に神の国があるとして、太古代の地上の神を天上へ押し上げ、上下の世界観に変えようとした。しかし日本本土ではできたが、この沖縄では、地上神を祀る太古代の横の世界観を、ついに変えることはできなかった。

『八重山島諸記帳』には、次のような記録がある。

猛貌<sup>もうぼう</sup>の御神、身に草木の葉を纏い、頭に稲穂をいただき、出現之時は豊年にして、出現なき時は凶年なれば、所中の人、世持神<sup>よもちかみ</sup>と名づけ崇め来たり候。終にこの神かって出現無くして凶年相続き候えば、豊年の願として人々かの形を似せ供物を備え、古見三村より小舟一艘ずつ賑やかに仕出し争わせ、祭りの儀式を勤め候。利生相見え豊年なれば、愈々その瑞氣<sup>ずいき</sup>を慕いて懈台<sup>けたい</sup>無く祭り来たり候。いま村にて世持役と申す役名も、是に準らえて祈り申す由に候。但しこの時由来伝え嘶有之也<sup>(13)</sup>

これによると、「猛貌の神」が稲穂を頭に頂いて、古見の三離御獄に出現された時は豊年であるが、出現されない時は、凶年であった。それで人々は、この「猛貌の神」を世持神と名付けて崇めた。出現がないときは、世持役が「猛貌の神」の格好をして出現したというのである。

古見の地で発祥した古い神事に「アカマター、クロマター神事」がある。高那、小浜両村に伝わり、さらに野原、新城<sup>あらぐすく</sup>両村、大津波（1771年）後、小浜島から石垣島の宮良村に伝わっているが、今日行われているのは、古見、小浜、新城（上地）、宮良の4集落である。その中の新城上地島の美御嶽のアカマター神事は、次のようである。

子アカマターが二神（赤い面をつけたアカマターと黒い面をつけたクロマター）と、親アカマターが二神、手に持った棒とむちを軽く打ち、音楽のリズムに合わせて踊る。そのあと御嶽の氏子集団であるヤマニンジュたちが、赤白2組に分かれ、東西に立ち、親アカマターと子アカマターを挟んで夜

中まで踊り狂う。アカマターたちの様子は、全身野ぶどうのかずらで覆い、子アカマターはマーニの葉を頭上に1本、親アカマターは4本立てている。御嶽境内には「祈豊年」の幟旗が2本立てられている。これは、「猛貌の神」が御嶽にあらわれた神事である。

前述の古見の聞書によると、稲を頭につけた「猛貌の神」が「世持神」であり、この神が出現したときは豊作だという。つまり「世」とは稲作の「世」であり、稲の一期を限っていう「世」である。麦でもなく粟でもない。古代の人々が常食にはできなかった稲のみが重要であり、稲の豊凶が、一年間の人間の幸福の度合を示すものであった。稲の豊作は、子孫の繁栄をもたらし、村の繁栄をもたらしたのである。宮良（石垣島）のアカマターは、海岸同窟から出てくるニイルピトだといわれている。ニイルピトは、ニライ国の人という意味である。ニイルピトは、海をわたり、この世とニライ国を行ったり来たりしたのである。

さらに、新城上地島のアカマター神事における子アカマターの出現は、稲と同じほど大切な子どもの豊かな成長を意味すると同時に、子どもはニライカナイからやってくるという思想をも意味していると考えられる。

また、この「猛貌の神」の出現がない年は凶年が続いたので、人々は豊年を願って「猛貌の神」に形を似せて出現させ、祭りの儀式を行った。その儀式を行ったのが「世持役」だという。

以上のことから、キネコサ祭りの役者たちは、「猛貌の神」ではないが、いずれも神に形を似せて出現している「世持役」だということになる。ニライからの神を導く「火のセヂ」を持つ提灯と「水のセヂ」を持つ龍を先頭に、大きな鏡餅の上に伊勢エビと昆布とを土産として、ニライからの神々が、東方からやってくるのが古式行列である。

ところで、沖縄には次のような稲種と鷲の伝説が残っている。

「沖縄東南部にある久高島くだけ島の浜に、白い小甕こがめに入って寄って来た五つの種子があった。その中にはシラチャネ、すなわち稲の種だけが欠けていたので、沖縄の始祖神のアマミキョが天にいのって、鷲をニライカナイにやり、求めさせた。鷲は三百日目に三穂をくわえてもどってきた<sup>(14)</sup>」

キネコサ祭りの鷹持役の持っている鳥は、見たところ鷹なのか鷲なのかかわからない。しかし、とにかく鳥なのである。鳥が稲霊を運ぶという伝説は、他にもいろいろな所にある。沖縄県国頭郡の田港たみなとの海神祭りの神歌では、おし鳥が運び、奄美大島では鶴が運ぶことになっている。要するに、7、8歳の子どもの演ずる鷹持役の意味は、稲霊と同じように大切な子どもの種を、ニライから鳥が運んでくるということなのである。

この中部地方には、生後1ヶ月すると、お宮まいりに赤子を連れていき、犬のはりこをつけてもらう行事が、古くからある。丈夫で犬のようにすくすくと成長することを願っての行事である。このことから、犬持役の意味は、子孫の繁栄を意味することがわかる。鷹持役と犬持役は神殿前での所作で、腰えさかこの餌籠の中のおにぎりを食べさせる。古代人にとっては、稲の豊作と子どもの健やかな成長は、同じだったのである。

また、沖縄で太陽をテダという。しかし神としてのテダは、仲松氏によると東からのぼってくる短

い間の太陽だという。身心の安らぎを覚え、なごやかな生気をもたらす東の太陽と、東の海の彼方から豊穡と幸福を与えるために来訪されるニライ神が一つになったのがテダの神である。テダは「火の神」であり、一番最初にニライカナイからきた神である。家族の生命を保育、守護する火のセズに、古代の人たちは崇敬と驚異とを持ち、神として祈るようになったのである。

キネコサ祭りの時も、大七五三縄作りの時も、手水場の北で御神火をたく。御神火は昨年とれた稲藁を燃やす。その御神火を、役者たちが自分の所作を終えると、持っていた祭具ではねあげていく。この所作は、役者たちが、火のセズを自分の祭具につけ、自分自身のニライ神としての力を強め、豊穡ばかりでなく、生活の幸福と、家族の生命の保育、守護の力をもつけたことを意味している。

### (3) 穀霊信仰

七所社は、すぐ東に御神田を二つ持っている。この田の世話は、氏子たちがし、とれたもち米とうるち米は、神への御供えと、キネコサ祭りの時に使う。この際、稲積<sup>いなづみ</sup>がなされる。

ところで、八重山群島の西表では、稲の生産期の境目に節祭<sup>しちさい</sup>が行われる。これは旧暦7、8月中の癸亥<sup>みずのと い</sup>の日から3日間で、その第2日目の甲子<sup>きのえ ね</sup>の日がもっとも重要で、その前後を「年の祖」といい、節日<sup>しちび</sup>を「ショウグワグワ（小正月）」といった。つまり節日とは稲の正月のことである。この頃まで、稲は稲積される。

この八重山群島には、シラと呼ばれる稲積方法があり、このシラは稲積を現すと同時に、人間の産屋<sup>うぶ</sup>生活を意味する名詞でもあった。愛知県の東北隅北設楽<sup>しだら</sup>の山村に、かつて「シラ山」と称する行事があった。それは霜月神楽<sup>しもつきかぐら</sup>の中にあるもので、多くの樹の枝やその他の材料をもって仮山を作り、前後に出入口を設け、内には栈道をかけ渡して、志願者はそこを通り抜けさせたのである。これは「胎内くぐり」とも、「生まれ清まわり」ともいわれた。

柳田國男氏は、稲作または稲積という語の方言は、日本本島中部以東ではニホ、ニヨウであるが、新嘗のニヒではないかという。また、西表島（古見島）ではシラが稲積であり、生産であるという。しかも前述の神楽の例から、シラ山が人間の胎内での忌籠りを想像させるとしたら、新嘗も稲積も同じ意味になる。つまり新嘗の本来の意味は、穀母が穀霊を産むために忌籠りをすることなのだ。お正月をむかえるためには、忌籠りをして、人も稲も「生まれ清まわり」をしなければならないと、古代の人は考えたのである。

吉田盛彦氏によると、七所社では稲の取入れが11月3日から3日間ほどあり、それから10日間ほど稲積をするという。3本の竹を組み合わせて三脚のようにし、竹を頂上に渡した上に稲穂を下にして干しておくのである。11月15日頃、塚A（付表2図ロ）の南で、氏子たちは脱穀をする。そのとき形が整ったもの一束は脱穀しないで、宮司の家の座敷の神霊屋<sup>みたまや</sup>のとなりの柱に、キネコサ祭りの日までつり下げておくという。これこそ新嘗<sup>にひ</sup>であり、稲積である。事実キネコサ祭りの日には、穀母から穀霊が生まれて、種壺の上に耕作男として稚児役と田行事役に担がれている。ニライからきた稲霊は、こうして現実世界で姿をあらわされることとなる。大七五三縄にかざられるのは穀母の霊なのだろう。脱穀のとき、来年の種もみとして2升ぐらいとっておかれるが、これも稲積になる。

七所社の境内にある塚C（付表2図ロ）の北東隅に、スズミという藁を丸く編んだ山高帽子のようなものがある。今は使われないが、昔はこのスズミを穂積のとき一番上にのせ、穀霊が生まれるための呪物としたという。

ところで、キネコサ祭りの日に、1本の笹竹をもって役者たちは庄内川へ入っていくが、このことは何を意味しているのだろうか。

岩塚の近くの庄内川が古代は海であったとすると、海の水、すなわちニライからの「水のセズ」で、役者たちは潔斎したということになる。笹竹が笹竹をのぼり、笹が海の方に折れると、その年は豊作だという。これは、ニライからやってくる穀霊と12人の神霊を、神の依代である笹竹で迎えられれば豊年だということなのである。もちろんそうなるように、役者は海の方からのぼって笹竹を折るようにする。

一方、沖縄の大宜味村謝名城の海神祭りの時も、神女たちがニライの神を迎えるために海へいく。西表島の干立や祖納の節祭も同じである。その後神女たちは、ニライ神とともに行列を作り御嶽へ上っていく。御嶽の神アサギ（神殿）で式典を行うと、祖霊神やニライ神とともに喜びながら、役者たちが色々な所作をする。キネコサ祭りと役者の数や所作は違うが、祭りの構造はまったく同じである。

さて、穀霊信仰にまつわる残りの諸役の意味を考えてみることにする。

「根神」の大城茂子氏は、「沖縄では餅は豊作を表わします」という。つまり、キネ役とコサ役で餅をつく所作をするということは、豊作を表していると考えられる。

つぎに田行事役である。還暦の人が演ずる田行事役は、笹竹をかついでいかない。つまり、彼はニライからきた神にはならないということである。神殿の前では、「天下泰平、五穀成就」の団扇を持ち、耕作男をかついできた鍬で田を耕す所作をする。田行事役は、現実世界の農夫を現わし、その農夫が神霊の宿る団扇を持つことにより、「天下泰平、五穀成就」をなすということだろう。団扇は四角い形で、中央の白地に字が書かれてある。まわりは白と赤を2枚重ね、1センチぐらいの幅で10センチぐらいの長さに切込みが入っている。これは沖縄の神女たちが持つ、神霊が宿るクバ（蒲葵）の扇の形を思わせる。

笠鉾役は笠をさしかけて、稲霊を守る役目をする。

稚子役は神殿の式典の時、黒地に赤い丸のついた扇子を持って舞う。

西表島の祖納の節祭の時、ミルク神なる神が、白地に赤い丸のついた団扇をもち、にこやかな顔の面をつけ、黄色い着物を着て、式典の時に舞う。ミルク神はニライカナイからきた豊穰と繁栄、幸福をもたらす神である。ミルク神の後から五穀持ちが、五穀の穂を持ってついてくる。それはちょうど稚子役のあとから、田行事役が稲霊をかついでくるように似ている。そのうえ稚子役は、昔、黄色い手ぬぐいを頭からかぶっていたというから、ミルク神と同じ役割をしていると考えられる。

つぎに、色について考えてみる。

キネコサ祭りの役者たちの衣装および祭りに使う幕は、節祭と同じように黒と白を基調にしている。「種おろしの祭文」で「黒めてでー」と歌うところがあるが、この黒は、「黒々といたしましょう」ということで、豊穰を意味している。

白は、神女たちが身につける衣装および、神の衣装である。清浄、潔白を表している。

赤は太陽の赤であり、ニライ大神の赤である。神としてのテダなのだ。

仲松氏は沖縄では黄泉<sup>よみのくに</sup>国の黄は、「うすぼんやりとした明」をさし、死後の世界を暗黒の世界としてでなく、現世即明るさと通ずる黄の世界としてとらえていたという。青の世界も淡い世界として、黄の世界に通ずるという。黄色はニライカナイの色なのであろう。つまり鬱金<sup>うこん</sup>で黄色く染めた布を、キネコサ祭りの役者たちが首にまくのは、ニライカナイからきた神であることを表わしている。さらに稚子役が持って舞った黒地に赤い丸の扇子は、ニライの大神テダのセヂによって豊穰がもたらされることを示していることになる。ミルク神も頭に華やかな絵柄のついた被衣をかぶるが、稚子役の赤い被衣姿は、テダのセヂを体につけたミルク神を思わせる。

稲霊を連れ、豊穰と幸せをもたらす神が稚子役なのである。

最後に射手役を考えてみる。

沖縄の古代の神歌を集めてある『おもろさうし<sup>(15)</sup>』の中に、「てだがあなにむかて」という語がある。これは「太陽の穴にむかって」という意味である。沖縄には、西に太陽の洞窟があり、太陽は一定の時をそこで過ごしてふたたび生まれ、東から上がってくるという思想があるのだ。

昔、中国に次のような説話があった。

太陽と月がいくつも一度に空に出て駆けまわり、地上はひどい旱魃<sup>かんばつ</sup>となり、灼け死ぬ人まで出た。そこで弓の名人が、太陽と月を一つずつ射落としていったが、残った最後の太陽と月は恐れをなして岩屋にかくれてしまった。あたりは一面真っ暗になったので、いろいろな動物に太陽と月を迎えに行かせた。どの動物も成功しなかったが、ついに雄鳥の美しい鳴き声によって太陽と月が戻ってきた<sup>(16)</sup>

この説話の中の雄鳥は、日本では鳥になっている。太古の時代では、鳥が太陽を穴から空へ運ぶ鳥だったのだろう。

以上のことから射手役<sup>いで</sup>が、東の空にむかって弓を引き「明の方の鳥を一羽打とうよ」というのは、「御日射<sup>おひし</sup>」の神事といわれるもので、太陽の運行を清浄にし、旱魃がおきないようにとの意味である。これも豊穰と繁栄をもたらす神事だと考えられる。

神殿での式典が終わってから、役者たちは、五杓盛と七杓盛のご飯を食べる。「御御供様」のように山に盛ったご飯である。ニライ神の来訪を心から喜び、祖霊神と、氏子（田行事役）とがもてなす行事である。神と共食することは、「神のセヂ」を身につけることであり、神になることである。3、5、7、は、沖縄では最高神事の時に使う数字である（大城茂子氏）とのことから、キネコサ祭りで五杓盛、七杓盛を出すということは、最高の感謝と豊作祈願をこめていることを意味する。キネコサ祭の概要の時述べたが、この餐応の式の後に社前祭が行なわなければならないのは、役者が神のセヂを身につけるという意味からいえる。

最後に12という数を考えてみる。昔は方位を表わすのに十二支を使った。十二支は12あり、宇宙の全方位を表わした。役者の数の12も、月の数といわれているが笹竹の枝の数の12も、キネ役とコサ役がつくこわ餅の大きさの12センチ四方という数も、宇宙を表わしているとする、このキネコサ祭りは、全宇宙の神を迎えての村民たちの切なる思いの大祭だったといえるのである。

\* \* \*

「人が死ぬと神になる」との思想が古代にはあり、死の世界は暗黒の世界ではなかった。死の世界と生の世界は、反対側に新しく生まれ出ることであり、死の世界から生の世界への往来は頻繁に行われた。

そうした世界観から行われるこのキネコサ祭りは、これまで述べてきたようにけっして奇祭でもないし、田祭りとして簡単に片付けられるものでもない。祭りの底に溢れている思想は、人間としての根本的な存在意識にまで及んでいる深いものであった。そこには、子孫を愛し、保護し続ける祖霊神と、繁栄と文化をもたらすニライ神のおそいを受けて、子孫たちは幸せになるのだとの古代からの思想源流があったのである。

#### 注

##### (1) 「種おろしの祭文」(唄)

シテ	明神のごくうでんの種おろしいたそうよ	/	ワキ	おお	それようござろうよ		
シテ	村中の種おろしいたそうよ	/	ワキ	おお	それようござようよ		
同音	やあらたのし	やあらたのし	/	野も山も打ちひらいて田につくろってでー			
同音	諸頭衆の中には白ひげの種あり	千石も万石もでー				三べん	
同音	侍衆の中にはめっぽう	ほうあって	/	石の子の種あり	千石も万石もでー		
同音	じょうろ衆の中には十二ひとえの	/	石の子の種あり	千石も万石もでー			
同音	このほどもに	このほどもに	ふくの種まこよ	おろろ	おろろ	おろろ	三べん
シテ	せんじょう申す	ワキ	まんじょう申す				三べん
シテ	いいもりない	ワキ	さかもりない				三べん
シテ	いなずま米かめ	ワキ	我まずかめ				
同音	おろろに	おろろに	ふくの種まこよ	おろろ	おろろ	おろろ	三べん
同音	てによく	てによく	てにてにつずいた				三べん
同音	うてめて	田うえて	黒めてでー				三べん

(振仮名省略)

- (2) 攷史堂著『尾張志』博文社 (1892) 101 頁
- (3) 津田正男著『尾張地名考』
- (4) 攷史堂著『尾張志』博文社 (1892) 107 頁
- (5) 仲村弥秀著『神と村』梶社 (1990) 18～19 頁
- (6) 安達進著『考古学からみた琉球史上』ひるぎ社 (1991, 第2刷) 25 頁
- (7) 牧野清著『八重山のお獄』あーまん企画 (1990) 449 頁
- (8) 吉田東伍著『大日本地名辞書』
- (9) 牧野清著『八重山のお獄』あーまん企画 (1990) 452 頁
- (10) 藤原維繩、菅野真道共著『続日本紀』
- (11) 仲松弥秀著『神と村』梶社 (1990) 18 頁
- (12) 仲原善忠著『おもしろ新釈』
- (13) 牧野清著 前掲書 453 頁
- (14) 『聞得大君御殿』の『御規式次第』(柳田国男著『柳田国男全集1』ちくま文庫 (1991 第7刷) 139 頁)
- (15) 平山良明著『沖縄古典文学』むぎ社 (1990 初版発行) 26 頁
- (16) 萩原秀三郎著『再生装置図鑑』の「時間の更新と世界の創減」ヴィジュアルフォークロア (1992) 116～117 頁